

聖書ヘブル語における

「独立不定形」と定動詞の語順

— hālōk(hālōk) を巡って —*

竹内 茂夫

1. はじめに

聖書ヘブル語には「独立不定形 (infinitive absolute, 以下 I A)」と呼ばれる語形変化しない文法形式がある。その用法の一つに、同族目的語 (cognate object) 或いは内的目的語 (internal object)¹⁾のように、定動詞と同じ語根の I A を用いる用法がある²⁾。この用法が旧約聖書に比較的多く現れる動詞 hālak「行く、歩く」とその I A hālōk (母音文字を含む) と hālōk (母音文字を含まない) を例に、その語順を観察してみよう。なお hālōk と hālōk は異形態に過ぎず³⁾機能的には変わらないので、この小論では例文以外は hālōk で代表させる。

同族目的語的な I A は、単独では定動詞の直前又は直後に現れると言われている⁴⁾。なお hālōk には下線が施され、定動詞は四角で囲まれている。

- (1) wattō(')mer hālōk 'ēlōk 'immāk

「彼女は言った、『私はあなたと必ず一緒に行きます。』」(士 4:9)

- (2) lāmmāh-zzeh šillaḥtō wayyēlek hālōk

「一体なぜ彼を送り出したのですか。彼は行ってしまったのですね。」(2サ 3:24)

上記のパターンに加えて、I A に更に他の語根に基づく I A が接続詞 w⁵⁾ と共に後続する I A₁w I A₂ というパターンがある (I A₂ にも下線を施す)。

- (3) wayyēlek hālōk wə'ākōl [IA]

「彼は食べながら歩いて行った。」(士 14:9)

更に、 $I A_1 w I A_2$ のパターンにおいては、 $I A_2$ の代わりに現れ得る文法要素のことが Gesenius によって示されている。そうした文法要素も便宜上 $I A_2$ と呼ぶことにする。すると、それらを含むパターンも $I A_1 w I A_2$ 呼ぶことができる。

- (4) wattēlek hālōk wəzā 'āqāh [WəQTL]
「彼女は泣きながら歩き続けた。」(2♠ 13:19)
- (5) wayyēlek hālōk wayyitnabbē(') [WAYQTL] 'ad-bō' ō bənāyōt bārāmāh
「彼はラマのナヨテまで預言しながら歩き続けた。」(1♠ 19:23)
- (6) wayyēšē(') yišmā 'ē(')l ben-nəṭanyāh liqrā(')tām min-miṣpāh hōlēk hālōk ūbōkeh [PT]
「ネタヌヤの子イシュマエルは彼らを迎えにミツパを出たが、泣きながら歩き続けていた。」(Iv 41:6)
- (7) wayyēlek dāwīd hālōk wəgādōl [ADJ]
「ダビデはますます偉大になっていった。」(2♠ 5:10)

この小論では、定動詞と同族目的語的な $I A$ の語順に関して、どのような場合にそうした $I A$ が定動詞に先行し、どのような場合に後続するのかを、hālōk を例にして統語的な側面から説明を試みたい。

2. 同族目的語的な $I A$ と定動詞の語順に関する従来の見解

それでは、同族目的語的な $I A$ と定動詞の語順については、従来どのように言われて来たのであろうか。ここでは主に統語的な観点から諸説をまとめてみたい。

同族目的語的な $I A$ に関する Gesenius⁶の見解は、以下のように要約できる。(1)動詞に先行する $I A$ は、陳述の最初においては頻繁に⁷, 'im 等に後続する条件文においては非常に頻繁に現れる。(2)動詞が命令形、分詞の場合には $I A$ は決して先行しない。(3)動詞に後続する類に属する場合として、 $I A$ に第二の $I A$, 「動詞的形容詞 (verbal adjective)」, perfect consecutive (WəQTL形), imperfect consecutive (WAYQTL形), 分詞, が続く場合⁸(上記の(3)~(7)の例文)があり、付随する状況や反対の行為を表す。(4) $I A$ が定動詞に先行する場合には強調を、後続する場合には強調或いは継続を表す。

Joüon⁹の内的目的語 (objet interne) のような I A についての考えは、次のようにまとめられるであろう。(1)定動詞に後続する I A は、先行する I A より遥かに頻度が少ない。(2) I A は命令形や分詞には常に後続する。(3)Hitpael 形 (主に再帰の意味を表す派生形の一つ) の I A は常に後続する。(4)定動詞に後続する I A には、「第二の」I A が続く。第二の I A の「代わりに」定動詞、分詞が現れることもある。

Lambdin が I A の章¹⁰において述べていることは、(1) I A の位置は定動詞の前がより通常であるが、定動詞が自動詞として用いられれば後続することもあり、(2)二つの I A の連続が定動詞を補足する例もあるということである。また、別の「hālak の慣用語法」の章¹¹では、I A hālök は(a)同語根の定動詞を修飾し補足する要素として考えられる可能性があること、(b)二つの I A が連続する中で最初の I A が hālök の場合、継続や漸進的な行為のニュアンスがあることを述べている。

Muraoka¹²には幾つかの興味深い見解が挙げられている。(1)同族目的語的な I A の構造が繰り返されている章句がある。即ち、1サム 20:5-9に見られるように、数節にわたって I A が現れることがある。(2) I A が定動詞の前後いずれに現れても明確な意味の相違は認められない。ただ、定動詞先行型の I A のほうが頻度は遥かに高く、verbal idea を強調する目的のためには先行型の構造の方が好まれる。しかし、形式上制限されている (formally conditioned) ことが二つあり、I A は(i)命令形には後続せず¹³、(ii) I A と定動詞の間に割り込む単語は、否定詞以外にはない¹⁴。(3)同族目的語的な I A の構造の反復は、大部分が生会話と legal text において用いられている。換言すれば、narrative prose においてはまれにしか見られない。(4)この構造は、後期ヘブル語では使われなくなる傾向があった¹⁵。更に、(5) I A + 定動詞 (QTL 形) の構造は、「大衆型の語り (popular-style narrative) 」の冒頭の典型的な方法であることも記されている¹⁶。

以上の見解は、語順に関しては次のように要約することができよう。

- (8) ①Muraoka, Joüon によって示されているように、同族目的語的な I A は定動詞に先行する場合の方が多い。また定動詞に先行する場合と後続する場合では、意味の相違が認められる。(Muraoka 以外による)。
②同じく Muraoka, Joüon に示されているように、同族目的語的な I A が定動詞に後続するのは構造的な理由による場合がある。定動詞が命令形の場合には定動詞が先頭に来るので、I A は後続する。また、Gesenius, Joüon は定動詞が分詞の場合にも I A は後続すると述べているが、その根拠は示されていない。

③Gesenius が述べているように、(3)～(7)に示されたような第二の I A を伴う I A₁ w I A₂ ユニットは定動詞に後続する。

本章においては、hālōk を含む文を別の角度から統語的に検討したいと思う。

3. I A と定動詞の語順 — 二つのパラメーターによる解釈 —

従来の見解は、同族目的語的な I A hālōk が動詞に先行するか後続するかによって意味の違いが認められるということが主眼であったように思われる。しかしながら、以下で見るように w I A₂ を伴う場合の多くに定動詞に WAYQTL 形、分詞形が現れるという特徴があるように思われる。ということは、w I A₂ と定動詞形が I A の語順にかなりの影響を及ぼしていることが推定できるのである。そこでこの章では、二つのパラメーターを設定して、文例を検討して見たいと思う。

(9) パラメーター 1 : [±定動詞が WAYQTL 形又は分詞形 (以下 ±WAYQTL/PT)]

パラメーター 2 : [±w I A₂ が hālōk に後続 (以下 ±w I A₂)]

この章ではヘブル語の例文、逐語訳、邦訳を挙げ、必要に応じて解説を加える。また逐語訳において、動詞、形容詞は (3 人称) 男性単数形が最も無標な形なので、それ以外の場合のみ特記する。なお定動詞を四角形で囲んでいる。

3. 1. パターン① [+WAYQTL/PT] [+w I A₂]

3. 1. 1. 定動詞が WAYQTL 形の場合。

WAYQTL 形は接続詞 w と YQTL 形が複合しているというその形態上文頭に現れるので、他の文法要素は後続せざるを得ない。また、この場合 w I A₂ が必ず伴っている。

(10) wayyēlek [WAYQTL] hālōk wə'ākōl

&+he went/go+IA/&-eat+IA

「彼は食べながら歩いて行った (<食べながら歩き歩いた)¹⁷。」(士 14:9)

- (11) wəhehāmōn 'āšer bəməhānēh pəlišīm wayyēlek[WAYQTL] hālōk wārāb¹⁸(ADJ)
 &-the-tumult/REL/in-camp of/Philistines/&the went/go+IA/&-much
 「ペリシテ人の陣営の騒ぎは、ますます大きくなっていった。」(1♠ 14:19)
- (12) wayyēlek[WAYQTL] hālōk wəgādēl(ADJ) 'ad kī-gādal mə'ōd
 &the went/go+IA/&-become great+VAdj/until/that/he became great/very
 「彼はますます偉大になっていき、遂には非常に偉大になった。」(創 26:13)
- (13) wayyēlek[WAYQTL] hālōk wəqārēb(ADJ)
 &the went/go+IA/&-approach+VAdj
 「彼は次第に近づいていった。」(2♠ 18:25)

(12)(13)に現れる gādēl, qārēb は「動詞的形容詞 (verbal adjective)¹⁹」, 又は分詞²⁰と言われているが, 状態動詞で qātēl (<*qatil-) という母音パターンのQTL形 3人称男性単数形とみなすことも不可能ではない。しかしながら, 仮に後者のように考えられるとすると, 問題のQTL形から新たな文が始まると考えられ, wayyēlek hālōk が一つの動詞句を形成しているということになる。(13)であれば wayyēlek hālōk が一つの動詞句であるという解釈は不可能ではないかもしれない(あえて訳せば「彼は行き続けて近づいた」)が, (12)の場合には wayyēlek hālōk とその後では文脈がつかないように思われる(「?彼は行き続けて偉大になった」)。もし gādēl, qārēb が動詞からの派生形であるとするならば, 行為動詞 hālak から I A hālōk が, 状態動詞 gādal (又は gādēl), qārab (又は qārēb) からこのような「動詞的形容詞」(いずれも通常の形容詞形は qātōl (<*qatul-) パターンの gādōl, qārōb) と呼ばれる形が派生し, I A hālōk と並列に現れて, 定動詞を修飾していると考えられる。

- (14) wattēlek[WAYQTL] hālōk wəzā 'āqāh[QTL]
 &+she went/go+IA/&-she cried out
 「彼女は泣きながら歩き続けた (<歩き続けて泣いた。)」(2♠ 13:19)
- (15) wayyēlek[WAYQTL] hālōk wayyitnabbē(')[WAYQTL] 'ad-bō'ō bənāyōt bārāmāh
 &the went/go+IA/&the prophesied/until/to come-his/into/Naioth/in/Ramah
 「彼はラマのナヨテまで預言しながら歩き続けた (<歩き続けて預言した。)」
- (16) wayyēlek[WAYQTL] dāwīd hālōk wəgādōl[ADJ]²¹ (1♠ 19:23)
 &the went/David/go+IA/&-great
 「ダビデはますます偉大になっていった。」(2♠ 5:10)

(14)の wəzā 'aqāh は Gesenius が言うように一体の $WəQTL$ 形ではなく、単に $wə+QTL$ 形に過ぎず、メインの行為を表す $WAYQTL$ 形 wattēlek に付随して背景を表すための QTL 形であると考えたほうがよいと思われる。また(15)の $WAYQTL$ 形 wayyitnabbē(') はメインの行為であるが、hālōk が先行しているために $w I A_2$ のパターンの一つとみなされて付随の行為を表しているのかもしれない。(16)の gādōl は一般に形容詞と見なされるのが通常であるが、動詞 gādal の $I A$ とみなすこともできる²²。しかし、ここでは状態を表す最も一般的な文法要素である形容詞とみなす。

- (17) wayyēlek[$WAYQTL$] 'ittāh 'išāh hālōk ūbākōh 'aḥrēhā 'ad-baḥūrim
&the went/with-her/husband-her/go+IA/&-cry+IA/behind-her/until/Bahurim
「彼女の夫は彼女の後について泣きながらバフルムまで歩いて行った。」(2^{sa} 3:16)
- (18) wattēlek[$WAYQTL$] yad bənē yiśrā'ēl hālōk wəqāšāh[ADJ] 'al yābin melek
kənā 'an
&it went/hand of/sons of/Israel/go+IA/&-hard+FSg/on/Jabin/king of/
Canaan
「イスラエルの子孫の手(=勢力)はカナン王ヤビンに対してますます激しくなっていた。」(士 4:24)

3. 1. 2. 定動詞が分詞形の場合.

定動詞が分詞形の場合にも、 $I A w I A_2$ は後続する。

- (19) wəham' assēp hōlēk[PT] 'aḥrē 'ārōn YHWH hālōk wəṭāqō^a baššōpārōt²³
&-the-rearguard/going/after/ark of/Lord/go+IA/&-blow+IA/with-the-horns
「またしんがりは主の箱の後を角笛を吹きながら歩いて行った。」(3^{sa} 6:13b)
- (20) wəšib 'ah hakkōhānīm nōšə' im šib 'ah šōpərōt hayyōbəlīm lipnē 'ārōn YHWH
hōlēkim[PT] hālōk wəṭāqə'ū[QTL] baššōpərōt
&-7/the-priests/lifting+MP1/7/horns of/the-rams/before/ark of/Lord
going+MP1/go+IA/&-they blew/with-the-horns
「7人の祭司は主の箱の前を七つの雄羊の角笛を掲げ、角笛を吹き鳴らしながら歩み続けていた(＜歩み続けて角笛を吹き鳴らした)。」「(3^{sa} 6:13a)

- (21) wəšim 'i hōlek[PT] bəšela ' hāhār lə 'ummātō hālōk wayqallēl[WAYQTL]
waysaqqēl[WAYQTL] bā' ābānīm lə 'ummātō
 &+Shimei/going/in-side of/the-hill/parallel to-him/go+IA/&+he cursed/
 &+the pelt/with+the-stones/parallel to-him
 「さてシムイの方は呪ったり石を投げながら彼と並行して山腹を歩いていた
 (<歩き続けていて呪い石を投げた).」(2㉔ 16:13)
- (22) wayyēsē(') yišmā 'ē(') l ben-nəṭanyāh liqrā(') tām min-miṣpāh hōlek[PT]
hālōk ūbōkeh[PT]
 &+he went out/Ishmael/son of/Nethaniah/to-meet-them/from/Mizpah/going/
 go+IA/&-weeping
 「ネタヌヤの子イシュマエルは彼らを迎えにミツパを出たが、泣きながら歩き
 続けていた (<歩き続けていて泣いていた).」(2㉕ 41:6)

I A₂がQTL形の場合は、実際には定動詞と hālōk で一つの動詞句を形成し、QTL形自体で一つの動詞句を形成していると考えられる。即ち、QTL形という定動詞形で表されることによって、二つの行為の時間的な同時性ではなく、「...して...した」という行為自体の方に焦点があると考えられる。しかしながら、I A₁ w I A₂パターンで現れることによって、結果として二つの行為の同時性を表しているものと思われる。これらの点において、(20)は、同じ節に現れるが I A₂が I A である(21)とは異なるのである。(21)の二つのWAYQTL形も行為の同時性ではなく、行為自体に焦点があることを示しているように思われる。(22)では、WAYQTL形 wayyēsē(') で示されている行為がメインであり、分詞形 hōlek, bōkeh はメインの行為の背景を形成するものであると思われる。従って、分詞形 bōkehは I A hālōk と並列ではなく hōlekと並列であり、hōlek hālōk で動詞句を形成していると考えられるべきかもしれない。

- (23) wayhi hēmāh hōlekīm[PT] hālōk wədabbēr
 &+it happened/they/going+MPl/go+IA/&-speak+IA
 「彼らが話しながら進み続けていると」(2㉖ 2:11)

派生形Pielは、(23)の dabbēr のように I C形が I A として用いられる例が多い²⁴。

3. 2. パターン② [+WAYQTL/PT] [-w I A₂]

定動詞がWAYQTL形の場合には、w I A₂が伴わなくても I A は後続する。

- (24) lāmmāh-zzeh šillahtō wayyēlek[WAYQTL] hālōk

why/ADV/you send off-him/&+he went/go+IA

「一体なぜ彼を送り出したのですか、彼は行ってしまったのですね。」(2サ 3:24)

3. 3. パターン③ [-WAYQTL/PT] [+w I A₂]

定動詞がWAYQTL形、分詞形以外、即ちYQTL形、QTL形の場合には、I A₁w I A₂は定動詞の前後どちらにも現れ得る。

- (25) bimsillāh 'aḥat hālōk[QTL] hālōk wəgā 'ō

along-highway/one/they went/go+IA/&-low+IA

「それらは一筋の大路をモーと鳴きながら進んで行った²⁵。」(1サ 6:12)

- (26) hālōk ūbākō yēlēk[YQTL] wə'et-YHWH 'ēlōhēm yəbaqqēšū

go+IA/&-weep+IA/they go/&-ObJM/Lord/God-their/they seek

「彼らは泣きながら歩み、彼らの神である主を求める。」(1レ 50:4)

- (27) hālōk wəṭāpōp tēlaknāh[YQTL] ūbāraglēhem tə'akkasnāh

go+IA/&-mince+IA/they go/&-in-feet-their/they make a jingling

「彼女達は気取って小股で歩いて行き、足でリンリンと鳴らす。」(伊 3:16)

I A₂が I A の場合には I A の並列のために一つの句としての意識は強く、一つの単位として前後どちらにも現れるものと思われる。また、(26)(27)については、預言の中に現れている詩文であるということに留意する必要があるだろう。というのは、詩文は散文の文法が当てはまらないことがしばしばだからである。これらの箇所においても、他の行とキアスムス(chiasmus, 交差並行法)を構成しているために、もしかすると特別な語順である可能性がある。

3. 4. パターン④ [-WAYQTL/PT] [-w I A₂]

定動詞がWAYQTL形、分詞形以外で、I A にw I A₂が伴わない場合には、I A は定動詞の前後どちらにも現れ得るが、先行する例のほうが多い。

- (28) wattō(')mer hālōk 'ēlek[YQTL] 'immāk
 &+she said/go+IA/I go/with-you
 「彼女は言った、『私はあなたと必ず一緒に行きます。』」(士 4:9)
- (29) 'al-taššiu napšōtēkem lē(')mōr hālōk yēlōkū[YQTL] mē 'ālēnū akkašdīm
 NEG/you deceive/hearts-your/saying/go+IA/they go/from-on-us/the-Chaldeans
 「『カルデヤ人は我々の元から必ず去る』と言って自らを欺くな。」(Is 37:9)
- (30) hālōk hālōkū[QTL] hā 'ēšim limšō'h 'ālēhem melek
 go+IA/they went/the-trees/to-anoint/over-them/king
 「木々が自分たちの王を立てて油をそそぐと出かけた。(改)」(士 9:8)
- (31) wə 'attāh hālōk hālaktā[QTL] ki-niksōp niksaptāh ləbēt 'ābikā
 lāmmāh gānabtā 'et-'ēlōhāy
 &-now/go+IA/you went/for/long+IA/you longed/for-house of/father-your
 why/you stole/ObjM/gods-my
 「それはそうと、今やお前は行ってしまった。父の家が本当に恋しくなったからだ。だが、なぜ、私の神々を盗んだのか。」(創 31:30)

(28)(29)では、Gesenius, Muraoka によって指摘されているように、hālōk は物語の地の文の wayyō(')mer, lē(')mōr (<前置詞 lə+ I C' ēmōr. 直接話法を導入する)に導かれる実際の会話の最初に現れている。また(30)では、hālōk から物語が始まっている (hālōk hālaktā[QTL] hā 'ēšim[S]... wayyō(')mərū[WAYQTL]... wayyō(')mer[WAYQTL], ... hazzayit[S]... 「木々は行った...彼らは言った...オリーブは言った...」)。 (31) は、この節において話のメインテーマに入っている。これらのことから、I A + V というパターンが新たな物語や新たなテーマを導入する傾向があるということも、言えるかもしれない。

- (32) wəhālōkū yōšabē 'aḥat 'el-'aḥat lē(')mōr nēlōkāl[YQTL] hālōk ləhallōt
 'et-pənē YHWH
 &+they go/inhabitants of/one/to-one/saying/we go/go+IA/to-entreat+IC
 ObjM/favors of/Lord
 「一つの(町の)住人は別の(町)へ行って言う、『我々も主の恵みを求めに行こう』」(ヰ 8:21)

(32)は、lē(')mōr によって導入される直接話法の先頭の部分なので、(28)(29)から推測すれば hālōk は動詞に先行しているはずであるが、実際には後続している点で興味深い。(32)が詩文であり、預言であることが関わっているのかもしれない。

4. おわりに

以上の二つのパラメーターを介した考察から、同族目的語的な I A hālōk と定動詞の語順に関する限り、次のように要約することができる。

1) 同族目的語的な I A hālōk は、I A₂を伴うかどうかにかかわらず、定動詞の形によって語順が決定される。定動詞がWAYQTL形の場合には形態上文頭に現れるという性質故に I Aは後続し、分詞形の場合には〔接続詞 w (+主語) + 分詞形〕というユニットの結合が強いと考えられるために I Aは後続する。

2) 同族目的語的な I A hālōk は、定動詞の形が上記以外の形であれば、I A₂を伴うかどうかにかかわらず、定動詞の前後どちらにも現れ得るが、可能な限り先行する傾向がある。

3) 1), 2)から、I Aが定動詞の前後どちらに現れても、明確に認められる意味上の相違はないと思われる。

今後はこの小論を元にして、他の動詞の I Aと定動詞の語順、特に定動詞が分詞形の場合の I Aの現れ方、hālōk では現れなかった否定詞 lō(') や小辞 nā('), gam が現れる場合の I Aと定動詞の語順の関係等を研究する予定である。

[略 号]

イザ = イザヤ書, エレ = エレミヤ書, サム = サムエル記, ゼカ = ゼカリヤ書,
ヨシ = ヨシュア記, 士 = 士師記, 創 = 創世記, 列 = 列王記

改 = 新改訳 (日本聖書刊行会, 1978²), 共 = 新共同訳 (日本聖書協会, 1987)

GKC = Gesenius, W. - E. Kautzsch - A. E. Cowley, Gesenius' Hebrew Grammar.

NCB = A. Even-Shoshan ed. (1989), A New Concordance of the Old Testament.

ADJ = adjective

IA = infinitive absolute (独立不定形)

IC = infinitive construct (構成不定形. いわゆる英語などの不定詞)

ObjM = object marker

OSf = object suffix

PT = participle

QTL = suffix conjugation (接尾辞による動詞屈折形. いわゆる完了形 qāṭal形)

YQTL = prefix conjugation (接頭辞による動詞屈折形. いわゆる未完了形 yiqṭōl形)

WAYQTL = 接続詞 wa + YQTL (いわゆる imperfect consecutive, wayyiqṭōl形)

WəQTL = 接続詞 wə + QTL (いわゆる perfect consecutive, wəqāṭal形)

[注]

*) この小論は, 昨年度まで筑波大学において教鞭を執られていた津村俊夫先生との議論に多くを負っています. ここに記して謝意を表します. また, 訳文を読み, 助言をしてくれた妻詠子にも感謝します.

1) この現象については GKC §117p-r. 参照.

2) GKC §113l-x 参照.

3) まれに ā に母音文字を伴った hālōk が見られる. ヨシ 6:13b の例を参照せよ.

4) "The infinitive absolute occurs most frequently in immediate connexion[sic] with the finite verb of the stem..." (GKC §113l). 但し, 否定詞 lō' を含む数個の小辞は I A と定動詞の間に現れる場合がある.

5) GKC §113s 参照. なお接続詞的 waw には wə, ū, wā の異形態があるが, 総称して w と表す.

6) GKC §113n-q.

- 7) この現象が起こる理由の一つとして挙げられている “...the infinitive absolute is evidently used only as possessing a certain fullness of sound(hence for rhythmical reasons...)”(G K C §113o.) のような音やリズムに対する考慮は、本来旧約聖書が読まれ聞かれるものであって、たとえ散文の部分であっても語りの口調が考慮されていたであろうということを思い起こすと興味深い。しかし、この小論の論旨からははずれるので、これ以上は言及しない。
- 8) G K C §113t-u.
- 9) Joüon, Grammaire, §123d-s. 特に §123d.
- 10) Lambdin, Introduction, §129.
- 11) Lambdin, Introduction, §170.
- 12) Muraoka, Emphatic, pp.83-92. 特に pp.88-90.
- 13) 但し、命令形に先行する文法要素があると述べている (Muraoka, Emphatic, p.89, n.21) が、それらは先行することによってトピック化されていると考えられるかもしれない。
- 14) 但し、逆の順序において挿入が認められると述べている (Muraoka, Emphatic, p.89) が、それに従えば、深層構造に元来逆でない語順があって、それが何らかの要因による何らかの変形を経て表層構造において逆の語順になったということであろうか。例えば horgēni (IMP+OSf) nā(')(ADV) hārōg(IA)「どうか私を殺してください。(民数記 11:15)」は、元来 *horgēni hārōg nā(') ということである。その場合の語順の変化の要因は何であろうか。
- 15) Muraoka によれば、サムエル記には66例、列王記には28例、ほぼ同じ出来事を記しているが後期の歴代誌には7例である (Muraoka, Emphatic, p.90)。
- 16) Muraoka, Emphatic, p.88, n.18.
- 17) (改)(共)共に「歩きながら食べた。」と訳されているが、定動詞が wayyēlek「彼は歩いた」である以上歩くことがメインの行為で、食べることは付随した行為であると考えられるので、拙訳の方がより適切であると思われる。
- 18) この形は「休止形 (pausal form)」と呼ばれる形で、rab の異形態である。
- 19) G K C §113u 参照。
- 20) N C B pp.226a, 1030c 参照。
- 21) 並行箇所 の 1 歴代誌 11:9には殆ど同じ文 (dāwid ではなく dāwid) が現れる。
- 22) N C B p.226a 参照。
- 23) 殆ど同じ構造の文がヨシ 6:9に見られる。
- 24) G K C §52o 参照。それによれば、基本形からの類推と考えられる qattōl パターンより I C の qattēl パターンの方が遥かに多く現れる。
- 25) ヘブル語本文のアクセント記号による文の分け方に従えば、拙訳が好ましいと思われる。

[参考文献]

Blake, Frank R.

1968² A Resurvey of Hebrew Tenses.
Roma: Pontificum Institutum Biblicum.

Even-Shoshan, Abraham.,ed.

1989² A New Concordance of the Old Testament. Using the Hebrew and Aramaic
Text.
Grand Rapids, Michigan: Baker Book House.

Gesenius, W. - E.Kautzsch - A.E.Cowley.

1910² Gesenius' Hebrew Grammar, ed.by E.Kautzsch; 2nd Eng.ed.by A.E.Cowley.
Oxford: Clarendon Press.

Hammershaimb, E.

1963 "On the so-called Infinitivus Absolutus in Hebrew",
Hebrew and Semitic Studies, presented to G.R.Driver, ed.by D.W.Thomas
and W.D.McHardy.
Oxford: Clarendon Press.

Jolion, P.Paul.

1965² Grammaire de l'hébreu biblique.
Rome: Institut biblique pontifical.

Lambdin, Thomas O.

1971 Introduction to Biblical Hebrew.
London: Darton, Longmann and Todd.

Longacre, Robert E.

1989 Joseph: A Story of Divine Providence. A Text Theoretical and
Textlinguistic Analysis of Genesis 37 and 39-48.
Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns.

Muraoka, T.

1985 Emphatic Words And Structures In Biblical Hebrew.
Jerusalem-Leiden: The Magnes Press, The Hebrew Univ. - E.J.Brill.

Tsumura, David Toshio.

1986 "Niphal with an Internal Object in Habakkuk 3:9a",
Journal of Semitic Studies 31: 11-16.

Word Order of the Infinitive Absolute and the Finite Verb in Biblical Hebrew

TAKEUCHI Shigeo

Biblical Hebrew has a grammatical form called "the infinitive absolute (=IA)". The IA is often used with the finite verb like a cognate object or an internal object, having the same root of the verb. It has been said, as far as such an IA is concerned, as follows: that the IA (often immediately) precedes or follows the verb by itself with some differences in meaning; that the prepositive IA is far more frequent than the postpositive one; and that when a second IA (or an adjective and so on) appears with a conjunction w after the first one, they follow the finite verb.

In this paper, the sentences with a cognate object-like IA hālôk are syntactically studied through two following parameters, i.e.:

parameter 1.[\pm the finite verb is a WAYQTL-form or a participle]

parameter 2.[\pm the conjunction w plus a second IA follows hālôk]

Our conclusion is as follows: that the position of the cognate object-like IA hālôk, whether or not a second IA appears after the hālôk, is decided according to the form of the finite verb. Thus, the WAYQTL-form being placed in the beginning of a sentence, the hālôk follows it. And, the participle being the finite verb, the combination of [conj.w (+ subject) + participle] may be strong, the hālôk hence can not precede it; that, except the preceding case, the hālôk precedes the finite verb, whether or not a second IA follows; and that there is not any difference in meaning between the prepositive IA and the postpositive one consequently.